
【夢幻の大陸詩】 月姫楽土の子供たち

水城杏楠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【夢幻の大陸詩】 月姫楽土の子供たち

【Nコード】

N7313X

【作者名】

水城杏楠

【あらすじ】

まだ世界に名前がなかったころ、サーラと呼ばれる地は、巫女とそれを守護する選ばれた者たちを中心とした、小さいながらも秩序ある国だった。だが、謎の男によって民の一人が殺され、それから秩序は少しずつ壊されていく。……巫女の血を引く少年チエザはそんなことなど知らずに、もうまもなく迎える成人の儀式を心待ちにしていた。――舞台は神や精霊を信じていた先史時代、勝者の語る歴史に埋もれて消えた小国の、懸命に生き抜いた栄枯盛衰の物語。

序章 終焉の始まり 1

これは、古の物語。

今はただ、吟遊詩人のみが語り継ぐ、永い永い時を超えた逸話。セザー＝ラージュ大陸に、ようやく精霊たちの御名のもと、人々が一つの国を作り統治し統治されることを学び、文明が生まれた時。

まだ、世界に名前はなかった。

世界の中心はどこにもなかった。

あるのは真実と、それを疑わないところ。それだけをもって、彼らは生きている。

月明かりが降り注ぐ、静謐の大地の上で。

* * *

皮肉にも、それは闇の日の夜だった。

満月の夜ごとに盛大な祭りが開かれる習慣を持つこのサーラ国の新月の日は、闇の精霊が支配しているということ、まるで死んだ街のような閑寂の中に、民はひっそりと身を潜めている。

「……ルーシファー様がおられない夜に……こんなことになるうとは」

後悔を交えた低い呟きが、人気のない真の暗闇に響いた。

明かりを持って小走りする影が一つ。

くるぶしまでも隠すどころか裾は長く後ろに流した、ゆったりと

した衣服を纏った、まだ二十五歳ほどの青年だった。穢れのない一枚の白く大きな麻の布を身体へ巻きつけ、腰紐を使って留めている。ラカーユと呼ばれる独特な衣装だ。肘あたりから見えている両腕には、太い赤銅色の腕輪をしていた。

長い髪の毛は、黒色にとどころ緑を交えた美しい色あい。その緑は薬草であるラヌーの葉を用いて染めているものだ。それを金色の布で緩く巻いて銀の留め具を髪に差している。この金色の布は、この国において一番の珍品であるトリアの華から取れる金色の綿を伸ばして糸にしたものを用いて織られたもの。

彼が身につけているすべては、貴重で緻密なものだった。

そして、彼のいでたちでもっとも印象的なのは、額に擁かれた十字の紋章だ。

金色のそれは、簡素な十字の形をしているが、どこか聖性を持って、指の第一関節ほどの大きさで額に浮き出ているように見える。人工的なものではない。だが、こんなふうに痣ができることもないだろう。

彼は回廊を無心で歩く。

回廊といっても、土レンガで造られた柱と屋根代わりに掛けられた大きな布、そして歩きやすいように大きめの石を削って平らにしたものを敷き詰めた床があるだけだった。その両側には針葉樹であるスーの樹が植えられている。

木々の間から見える闇色の空には、透き通る満天の星。

それは、今宵が新月であり、闇夜を支配する最も明るい月の存在がないから。

見上げた空から視線を外すと、眼前に小さな明かりが見えた。太い木の棒に使われなくなった古い布を巻きつけて炎を灯しているそれは、だんだんと彼に近づいているようだった。

「……………」

まさか、と青年は懸念し、足を止めた。闇の日の夜に出歩く民など、サーラ国にいるはずはないのだ。

隠るべきか悩んだ。だが、青年も同じように明かりを手にして
いる。気づいたと同時に相手にも気づかれているのは必至だった。
青年は覚悟を決めて、気づいていないふりを決め堂々と回廊を歩
いていくことにした。

だが、やがて見えた影は、青年と同じような衣を纏う男性だった。
その顔には見覚えがある。そして、彼は幼い子供を連れていた。

「チエザ！」

相手もこちらの姿を認識して、名を呼んだ。やはり聞き覚えのあ
る声だった。

「ロア」

同じような衣服を纏い、同じ形の紋章を額に抱く、彼と同年代の
男性だ。身長が高く、すらりとした体躯、背中で緩く結ったくせの
ある赤茶色の髪が生ぬるい風を孕んで揺れていた。

「チエザーっ」

明るい声とともに、闇の中から走り寄った小さな影を、彼はしゃ
がみこんで軽く抱き留めた。かわいらしい少年だった。彼らと同じ
ような衣だが、少し薄い麻を二枚使用していること、髪止め具が
銀ではなく金色であることなどの違いがある。

「アース様。なりませんよ。このような闇の日にお外に出ては災い
が起こるやもしれません」

もうそれはすでに起こっているのだが、あえて青年　チエザ
は言わずにおいた。まだ七歳の少年だ。幼い彼をこれ以上脅えさせ
たくはなかった。

「でもね。僕どうしてもチエザに早く会いたかったの。だから、姉
君さまにお頼みしてロアと行っていいってことになったの。みんな
すぐく心配そうなお顔をしているよ。でも、チエザはきっと笑って
くれると思ったから」

幼いアースですら、周りの人々の顔色を見て不安になっている。
チエザは炎を灯した木杖を石の間に差し込み、彼を少し強く抱きし
めてやった。

「大丈夫でございますよ。アース様は何も心配なさらずとも、我らリ阿斯がサーラ国をお守りしておりますから」

「うんっ。チエザならそう言ってくれると思ってた」

アースはチエザの腕の中で、安心したように笑顔を宿した。身体を離してチエザもそれに笑みを返すと、木杖を持ち直して立ち上がる。そして、傍らに待つロアを見た。

「……月姫の巫女様、は」

おそろおそろ尋ねる。

今もつとも知りたい情報を。簡潔に。

「心配はいらぬ。無論ご無事でいる」

当然のように、ロアは無表情のまま答えた。

「おさすがだな。このような状況にあっても落ち着いておられる……。おれにチエザの様子を見てくるようにとお命じになったからこうして迎えに来たのだ」

「……そうか」

まずは安堵し、ほっと一息ついた。翳っていた彼の藍色の瞳にいくらか光が戻る。

肩の荷が半分降りた感じが、した。

チエザは木杖をロアに渡し、アースを抱き上げる。静かな闇夜に、幼い少年のうれしそうなしゃが声響いた。

こういうときはやはり、子供の無垢さがうらやましくもあり、またそれに救われる思いもある。

「では急ぐとしよう。早くご無事なお姿を拝見したい」

「そうだな。いま月姫の巫女様は聖月の宮のもっとも奥にある一室におられる。案内しよう」

序章 終焉の始まり 2

磨き上げられた巨大な石の上に何枚もの上質の麻を重ね合わせ、その上に小柄な少女が座っていた。

中肉中背のチェザが立っていても、彼女と同じ目線にはならない高台である。

「月姫の巫女様、チェザ・リアス。ただいま戻りました」

彼女はまず、チェザの身を案じてその無事を喜んでくれた。辛い時であるのに、笑みを浮かべてチェザを迎える。

「ご無事でなによりです。貴方がなかなか来られないので心配しておりました」

彼女のこの声を直に聞かたび、チェザは何かに関わられたような気分になる。

それは、畏怖であり、尊敬であり、または誓いであつたりするせいなのだけでも。

玲瓏で、一点の曇りもない。

姿かたちは人間であるけれども、彼女はけっして人ではないからだ。少なくともこの国ではそう思われている。月姫の愛した地サーラでは、この少女こそが月姫の巫女、つまり月明かりの精霊である月霊ルーシファアの娘であるのだから。

額に十字の紋章を擁こうとも、彼らひとの身ではけっして彼女に近づけはしない。気高い瞳はだからこそ、月霊ルーシファアのように美しく金色に輝いている。

民にとって、この世のなによりも高邁な存在。

彼女は淡く微笑んだあと、表情を改めてチェザのとなりにいる小さな少年へとその視線を向けた。

「姉君さま」

「アース。隣のイーザのところへお行きなさい」

柔らかい語調ではあったが、そこには有無を言わせない様子が含

まれていた。これから話す内容はたしかに、月姫の巫女の実弟にあたるこの少年には酷なこともかもしれない。

「……でも」

なにか言いかけたが、ゆっくりと首を振る月姫の巫女を見てその口を閉ざす。

「はい。わかりました。姉君さま」

アースは何もわからない、幼いだけの少年ではない。賢しく、他人を思いやれる性格だ。ロアが付き添うと申し出たのを彼自身が断って、一人で部屋を出て行く後ろ姿は、小さな少年といえどもチエザには頼もしく見えた。

「さっそくですが、状況を話してくれますか」

実弟の背中をいとおしそうに見送ったあと、表情を改めて月姫の巫女はチエザを見据えた。

その瞳はまるで、世界そのものを示すかのように。

彼女の顔色は心なしに蒼白だ。普段からほとんど太陽にあたることのない月姫の巫女は、もともと病的に近い白さをその肌に宿しているが、今宵はそれがさらに白く、青みを帯びてみえる。錯覚だろうか。チエザは思う。自分のこの不安という感情を彼女と重ね合わせて見ているだけなのだろうか。

「残念ながら聖月の御剣は失われておりました。私が駆けつけたとき、聖月の祠には金の御剣がどこにも……」

感情を出さないように、彼は冷静をもって言葉を紡ぐ。

「金の……？ では銀の御剣は……」

細い眉をわずかにしかめて、彼女は問い掛けた。

東西南北を山と森に囲まれたサーラ国。北の森の中央に聖月の祠は存在した。そこに奉られているのが美しい二振りの短剣だった。どちらも片刃で反りはなく、柄の部分を入れて成人男性の手首から肘ほどもまでの長さである。聖月の御剣と総称されるそれらの剣の名を、それぞれ金の御剣、銀の御剣という。

「無事なお姿でした。独断ではと躊躇ったのですが、月姫の巫女様

のお力を頂きたく、御許へ持つて参りました」

チャザは服の合わせ目の中から一振りの短剣を取り出した。

銀の柄に銀の刃。片刃のそれは、儚く弱々しいかすかな光を放っている。

それはまるで、片割れを失った悲しみを表わすかのようで……。

月姫の巫女は、おそろおそろ左手をチェザのほうへ差し出した。

両手でチェザはそれを恭しく差し出すと、彼女はしっかりと受け取り、胸に押し抱く。

愛しそくに。

「ああ……っ」

慟哭の叫びを上げる少女の胸の中で、銀の刃が輝きを増した。

「……ああでも、なんとかしなくては。まさかこのような不祥事があるなどとは、今宵は御不在のルーシファー様もさぞお悲しみのことでしょう……」

憂いを帯びた金色の双眸を伏せて、少女はチェザと同じような科白をつぶやいた。

彼らが崇める月姫の巫女はいまだ少女。外見は幼い。十五歳を迎えたばかりだ。いつもは結い上げられ、金の装飾に覆われる長い黒髪も、今はただ背中に流している。その巫女らしからぬ無防備な姿が、チェザに少しだけ人間性を感じさせた。

月姫の巫女の服装はチェザやロアと似ているが、それに緑色が混じっている。それは白い布を一枚だけ使うチェザたちと違い、この少女は白い布と緑に染めた布の二枚を使っているためだった。染め物の技術が確立したのはここ最近の話で、今はまだ月姫の巫女のものにのみ使用される特殊な技術なのだ。

「なんとお詫びしてよいのか……。我らリアスの責任でございます」
「……いいえ。わたくしが誤ったのです。今日は闇の日。何も視えない日であるというのに……」

手の中にある銀の御剣の柄をきつく握り締めて、殊勝な言葉で月姫の巫女は否定した。それだけでもつたいなく、また申し訳なくチ

エザは思う。月姫の巫女に罪悪を感じさせてしまった。

新月を闇の日、そして満月を金の日、半月を銀の日と彼らは呼ぶ。闇の日には、民はもちろん月姫の巫女である彼女ですら、静かに時を過ごし、外出はしない。

「チエザ……私事で申し上げにくいのですが、姉君様は……？ 御出産も間近ですのに」

「フアーリー殿はネオンに頼んで参りました。彼女はリアスですし、彼女の友なので出産に立ち会ってもらおうと思っております」

両親を早くに亡くしたためか、月姫の巫女と二つ年上の姉、そしてまだ七歳の幼い弟は仲むつまじく、三人の並んだ姿をよく見かけたものだ。

「……そうですね。貴方の奥方様ですもの。わたくしが心配するまでもありませんでしたわ」

「いえ。月姫の巫女様が心細く思いだから、聖月の宮の様子を見に来るようにと私に言われたのはフアーリー殿でございます。きっと心配しているから、と。ですから私はロアの風霊シルフェを受けてすぐに聖月の祠へ参ったのです」

言葉は風霊シルフェが運ぶもの。それは近くても遠くても同じだった。視界に入らないほど遠くの民とは、意識して風霊シルフェを操ることによって会話を可能にしている。

「……信じがたい思いでしたが」

報告を受けたときの感情を思い出し、チエザは少し苦い表情をした。

たぶん、信じたくなかったのだろう、と冷静な今ならば思う。

今まで民が無断で聖月の祠に侵入したことなどなかったのだ。民にとって聖なる場所であり、侵すべからず地であるはずだ。いった誰がそんな暴挙を……とチエザが訝しむのも無理はない。

「ならば、早く姉君様の御許へお帰りください。きつと心細く思いなのは同じ気持ちのはずです」

こころなしに笑って見せて、月姫の巫女は言う。

「……しかし」

チエザとて出産を控えた彼女のそばにいてあげたいと思う。だが、リアスとしての責任がそれを阻むのだ。そして、この儚い様子を見せる月姫の巫女は、彼女の大切な妹であるのだから。

「もう侵入者の姿はどこにもないのでしょう？」

「ですが、彼らの狙いが聖月の御剣なのだとしたら、まもなくこちらへ参られるかもしれません」

聖月の御剣はそれぞれ共鳴し合っている。金を持つ侵入者は、遅からずこの場所を見つけるに違いない。

だが、そんな危険を冒してまで、チエザはこの銀の御剣を持つてこなければならなかった。なぜならそれがこの御剣の意志だから。半身を失った今、この銀の御剣に必要なものは月姫の巫女の聖なる力なのだ。

「彼らはなぜふたつの剣を持っていかなかったのでしょうか……？」

ふと気づいたように、ロアが独白する。

「正確には持つていけなかったのです。金の御剣は、身をていして半身を守り抜いたのですから」

双身をもつて一対となす、聖月の御剣。

月姫の巫女はその場で何が起こったのかをまるで知り得ているかのように、ロアの疑問にそう答えた。

「視える、のでございますか？ 闇の日に……」

月のない新月や雨の日、彼女の力はほとんど失われる。

「いいえ。そんな気がするだけです」

気高い月姫の巫女は、そう言つてすまなそうに聡明な瞳を伏せた。夜は刻々と更けていく。

侵入者を確認したときの騒ぎとは打って変わって、今は普段の闇の日以上の静けさに覆われていた。なにか得体の知れないものを恐れている雰囲気全体を支配して。

「……そういえば、ティエ様はどちらへ行かれたんだ？」

チエザは先ほどから気になっていたことを傍らのロアに尋ねる。

「それがな……お姿を見掛けたものは一人もいない。どちらに行かれたのかまったく……」

「……なに？」

十五人あまりの彼らリアスを纏めるべき存在のティエがいらない。こういった状況下で、とっさに思い付くのは悪い想像だけだ。

「まさか、ティエ様の御身になにか……」

自分の言葉が真実でないことを祈るのみだ。リアスの長とはいえ、一人の搜索のために戻るのに聖月の祠はまだあまりにも危険すぎる。「ティエはきつと無事ですわ。わたくしたちは、彼を信じましょう」

「……はい」

月姫の巫女の言う通りにする以外、この場で術はなかった。

ロアが静かに答えた、そのときである。

「……あ！」

「月姫の巫女様！」

二人の叫びが重なる。

両手で握り締めていた銀の御剣を、彼女は条件反射で振り落としていた。

「どうなさいました！」

彼女は両手をぐつと押さえてうずくまった。失礼を承知で、その左手に触れ、手のひらをゆっくりと開かせた。

「……っ」

彼女の双眸に痛みの色が走る。そして、その手のひらを見たチエザは、驚きのあまり言葉を失った。

「……御手、が」

手の平が熱く、まるで炎に燻られたかのように焼けていたのだ。ただれているほどではないにしろ、月姫の巫女の痛々しい姿にチエザは眉根をよせる。

「イーザ様を呼んでこよう！」

「頼む、ロア」

冷静さを装った二人の声音は、だが少し震えていた。

薬草を用いたり、生命の精霊に語りかけたりすることによって肉体の損傷を治療できるリアスは限られている。イーザもその一人だ。チエザやロアにはできない。

チエザは自分の衣の一部を強引に切り裂き、彼女の左手に巻く。同様の処置を右手にもほどこした。彼らの麻の服は縫っているわけではないので、男性の力ならば容易に切り裂くことができた。

「……月姫の巫女様」

気遣わしげに、チエザは月姫の巫女を呼ぶ。

うつむいていた顔を上げて、彼女は淡く微笑んでみせた。

「ありがとうございます。大丈夫です」

「しかしなぜ……」

ようやくチエザは、月姫の巫女が放り投げた銀の御剣を振り返った。

そして、信じられないというように瞳を見開いた。

カランと音を立てて、床の上に放り出されたそれは、湯に浸していたかのように白い湯気を放っていたのだ。

「銀の御剣が……」

「これは怒り。わたくしたちの心がそうであるように……御剣もまた、自らの怒りを抑え切れずにいるのでしょう……」

このときとつさに浮かんだのは半身の姿だ。月姫の巫女に抱かれているこの御剣ですらこのありさまなのだ。引き裂かれ、聖月の祠から無理矢理に離された金の御剣はどれほどの思いを抱いているだろう。

「月姫の巫女様！」

挨拶もままならず、ロアが一人の男性を連れて戻ってきた。

三十ほどだろうか。精悍な顔立ちの、長身の男である。白い肌はよく日に焼けて、チエザたちと同じ白い麻の服から覗く腕は浅黒くなっており、たくましい筋肉がついていた。

「月姫の巫女様、失礼いたします。イーザ・リアスでございます」
イーザは薬草を溶かした液の入った壺を持っていた。清潔な麻の

布を取り出し、その壺に浸す。チェザの巻いた布を取り、かわりにそれを丁寧に巻いていった。

「感謝いたします。イーザ」

「……………」

寡黙なイーザは何も言わなかった。ただ、月姫の巫女に向かって少し頭を下げてただけだ。年齢を重要視するこのサーラ国では、月姫の巫女とその家族を除いて、年齢による上下関係がある。チェザはイーザよりも年下なので彼よりさらに一步下がった。この場合はイーザがより月姫の巫女に近づく権利を持っていることになるのだ。

「しばらく御手を使わぬよう、お願い申し上げます」

「はい」

神妙な顔つきで月姫の巫女は頷いた、その時。

「！」

ほとんど明かりもなく、月姫の巫女表情をようやく認識できるほどの空間で、突然光が瞬いたのだ。

反射的にその場にいた四人全員が、床に落ちている銀の御剣を振り返る。

「銀の御剣、が……………」

これは、なんとという輝きだろうか。

壮絶なまでに美しく、また鋭く……………」

だが、しばし見惚れている時間はなかった。

「……………つ、月姫の、巫女……………さ……………まっ！　ご……………無事、で……………」

「ティエ様！」

右足を引き摺り、白い麻のラカーユを紅く染めた三十歳ほどの青年が文字どおり転がり込むようにして、現われた。

中心の柱をつかみ、だがつかみそこねてその場に崩れ落ちる。もっとも近くにいたロアが支えようとしたものの、とつさの力では成人男性の体重を支えるにはいたらずに、二人で倒れ込んだ。

即座にチェザとイーザが走り寄る。

「ティエ様！　ティエ様っ！　聞こえますか？　私の声が聞こえま

すかつ！」

懸命なロアの呼びかけに、ティエは首だけをわずかに動かした。

「ここに寝かせる。人手がいる。誰か呼んでこい。隣にいるはずだ！」

月姫の巫女の手当てをしていたときは無表情だったイーザの顔つきが変わる。怒鳴るように指示を下し、チェザがティエを横たわせ、ロアは再び部屋を飛び出した。

「……太刀傷、だ」

イーザの抑えた声音が、よりいっそうの現実味をチェザに与えた。おびたらしい深紅の液体は、イーザの白い衣をも紅く紅く染めていく。

手持ちの薬壺で手におえるものではない。治療の仕方などまるで知らないチェザでさえそれがわかるほど、ティエの衰弱は激しかった。

「お早く、お逃げ……くだ、さ、い。月姫の、巫女、さま」

「言葉を発してはなりません。動かずに」

穏やかに、だが有無を言わせない口調でイーザが彼を制する。

その間にも応急処置として、彼は持っているだけの布を薬壺に浸し、重傷と思われる右足から巻いていく。すぐにそれは足りなくなり自分の衣を破ると、それを見たチェザもすぐさま自分の衣を提供した。

彼らの衣は薄い一枚の麻から成り立っているものだが、それを広げると平均的な生活水準の民が住む住居には収まりきらないほどの大きさになる。少し切り取ったからといって、夜の寒さをしのげないほどではなかった。

「……月姫の巫女、様？」

いつのまにか月姫の巫女が石の祭壇から降りていた。手の怪我などなかったかのようにあっさりと、銀の御剣を拾い上げるのをチェザは見た。

「……来ます。憎悪が。そして、金の御剣の持つ、悲しみ、が」

月姫の巫女が言い終わる前に、チェザとイーザにも不穏な気配を感じ取ることができていた。

このとき、はじめてチェザは恐怖を……覚えた。
それは今まで、どんなときでも感じたことのない種類の感情。

(……ティエ様。月姫の巫女様)

月姫の巫女は、ティエの傍らに膝をつき、こともあるつか彼らリ阿斯よりも目線を低くしてティエの右手を握り締めていた。そうしているだけで、チェザには癒しの行為に思える。

チェザから見える横顔は、悲しみを帯びてよりいっそう儚く見えた。

「……足音が」

イーザが手を止めずに、そう呟いた。風霊シルフェが運ぶ音。月姫の巫女やリアスの耳は通常のそれ以上の働きをする。

速い足音。

それは確実に近づいていて……。

チェザは立ち上がり、戸口に近づいた。

そこには、男が一人いた。

「……っ！」

一目見ただけで、チェザは慟哭の叫びをあげそうになった。皮肉な宿命を呪いたくなくなった。

イーザと同じほども背丈があり、左手には輝きをもって抗う金の御剣が握られている。必死の抵抗があったのだろくに、男はこの御剣を手放しはしなかったらしい。その証として、金色の柄は男の血で紅く染まっていた。

そして、右手に握られているのはサーラでは見たこともない形の武器だった。

自分の背と変わらぬ長さのそれは、柄と刃の長さが半々で、その刃は太く重量がかなりあるように見受けられた。両刃からは真新しい血が滴っている。

面立ちもサーラ国の民とはまるで違う。薄い青色をした瞳。そし

てなにより彼らを驚愕させたのは長い髪の毛の色だった。

満月を金色で表わし、金色を月靈ルーシファアのための色とするサーラにとって、彼のその髪の色はまさに冒涇ともとれるものであったのだ。

豊かな黄金の髪。

金色をその身体に纏わせることができるサーラの民は限られているというのに。

（聖なる金色を生まれながらに纏いながら、なぜこのような愚行を犯せるのだ……）

サーラの民にとって、金色の髪を持つ彼の姿はまるで月靈ルーシファアそのものにすら思えた。たとえ、血にまみれた武器を手にしていようとも。

月姫の巫女ですら持ち得ない、金色の髪……。

「……何？」

男がなにかを言葉らしきものを発したが、チエザにはわからない。サーラで使われている言葉とはまるで違っていているように聞こえた。意味をなさない言葉。ただの奇声にしか思えない。

チエザもイーザもそして、月姫の巫女すらもなに答えられずにその場に固まる。どう反応していいのかわからないのだ。

彼の瞳は冷静に見えた。言葉は理解できなくてもその仕種のの一つが雅であり、他人を切り付けたりする精神を持っているように見えるのだ。彼の無表情がまったく崩れない。行動が読めない。それほどまでに彼は、静かで涼しい顔つきだった。

その男が片足を前へ動かした。

戸口をふさぐチエザが見えていないかのように歩む彼に、チエザは手をかざして行動を阻んだ。

「こちらへは入ることが許されぬ」

「彼が何かを言った。」

その直後。

男の右手が、動いた。俊敏に。

「……………っ！」

「チエザっ！」

条件反射的に動いたチエザのうめき声と骨を砕いた鈍い音、そして二人のリアスを連れて戻ってきたロアの鋭い叫び声がほぼ同時だった。

一瞬の閃光だった。

大きな刃が弧を描くようにして振り払われたのだ。

チエザの眼前が深紅に染まる。

風が、動いた。

「……………あ」

金の御剣と銀の御剣が一齐に輝きを増し、男が左手の痛みを更に感じたのだろっ、小さく声を上げたがその御剣を手放すことはなかった。だが、左手の限界を悟ったのか、がくりと傾いだチエザの身体を見届けることなく、男は何も言わずに踵を返して走り去った。

あとには月姫の巫女とリアスたちと、双身を引き裂かれた銀の御剣の、哀しみだけが残った。

どこかで赤ん坊の泣き声が聞こえた気がした。

一章 惑いの中で 1

月靈ルーシファアは、月明かりの精霊である。

それは、月姫の愛した地とも言われるこのサーラ国にとって、唯一の絶対的存在にして生きるための糧そのものだった。

月の暦を使うサーラ国では十五日、三十日が節目とされ、十五の倍数は特別な意味を持つ。三十日ごとに訪れる満月の夜には聖月祭が行なわれ、三十日ごとに訪れる新月の夜はひっそりと静謐の中に身を置き、外出を控える。また子供は十五歳で一人前となり、仕事を始める。

月靈ルーシファアの姿を見る金の瞳と月靈ルーシファアの声聞くことができる耳を持っているのが、月明かりの精霊の娘と言われる月姫の巫女である。

彼女たちは月に住む一族とされ、まだ世界ができたばかりのころ、月よりこの世界に舞い下りた月靈ルーシファアの娘はまだ文化を知らない人間を愛し、子を成した。月姫の巫女はその末裔であるがゆえに、月と同じ金色の瞳なのだという。

月姫の巫女たる証は、その金色の瞳だった。

月から舞い下りた娘の名をシステイザーナ、この国の言葉で聖月の乙女という。

そしてまた、月明かりの精霊は時と記憶をつかさどる精霊でもあった。

それゆえに、月姫の巫女はシステイザーナの記憶をすべて、受け継いでいる。けっして他人には話すことのない永遠の記憶を。

哀しみや歓びや、愛や憎悪のすべてを。

天から舞い下りた月姫の、そうした記憶を、彼女たちは持っている。

そして今日、その記憶を受け継ぎ、金色の瞳を宿す女性の名を、システイザーナ・アンディア・ルーシファアという。

秋、暦の始まりは、豊かな果実の月。最初の銀の日を迎え、民は
みな一斉に一つ年を重ねる。

月姫の巫女は三十歳になっていた。

一章 惑いの中で 2

「アンディア」

千人前後の民を従えるこのサーラ国において、彼女の名をそのように呼ぶことができるのはおそらくただ一人であろう。

「姉君様？」

私室で一人、座って空を眺めていた月姫の巫女アンディアは振り返り、戸口に立つ女性をそう呼んだ。

部屋といっても、彼らサーラ国の民が使った住まいは、土レンガを使用して作られた空間を、厚めの麻でいくつかに仕切っただけの住居である。仕切られた部屋の中央には少し太めの土レンガの柱を置き、屋根を支えている。屋根も麻で作られているが、防水のために樹脂を定期的に塗っていた。

民たちの家は、月姫の巫女の住まうこの宮のように、たくさんの部屋に分けられてはいない。だが、貧富の差がないサーラ国だから、月姫の巫女のために建てられた聖月の宮を除けば、どれも同じような大きさであるといえる。

「今日はもう準備は何もないと聞いて、会いにきてしまったわ」

「ありがとうございます。姉君様。あまりに盛大な儀式になりそうで、少し心配していましたから」

「月姫の巫女様が行なう金の儀式ですもの。当然でしょう」

風の音のような清らかな声でそう言い、彼女は微笑んだ。

暦のはじめに訪れる金の日に開かれる金の儀式。それは十日後に迫っていた。

「姉君様はどうでした？ 二年前……。不安ではございませんでしたか？」

心細い声ですが、妹をいとおしく思い、彼女は首を振ってみせた。「私の場合は貴女ほど大きな儀式ではございませんもの。訪れた民も貴女に比べればわずかでしょう」

「不安だわ……」

きつとこんなことは肉親である実姉以外には言えなかったのだろう。一つため息をもらすそのときのアンディアは聖性をもつて語られる月姫の巫女ではなく、民と同じ、三十歳になったときに行われる金の儀式を不安の中で待っている民の一人に見えた。

「でも、チェザも今年で十五歳では？ 銀の儀式が行なわれるのもうすぐでしょう」

「……ええそうね」

平静を装った声だということが、彼女とურიふたつの美貌を持つアンディアにはわかってしまう。

「どうなさったのですか？ おめでたいことなのに」

「時々思うのよ。あの子にはチェザの心が宿っているのかしら……」
「……っ！」

おもわず叫びそうになった。

ため息とともにもらった姉フアーリーの言っていることに、アンディアはもちろん心当たりがあった。

「……まさか、リアスに？」

「今日もカリのところへ行ったわ。ほかの仕事はなにも学ぼうとしないのよ」

サーラ国でもっとも名誉ある称号。それがリアスだ。月の紋章を宿す者とも呼ばれるそれは、サーラ国のために存在し、月姫の巫女を守護し、月姫の巫女を助け、月姫の巫女に絶対の信頼を誓う。

十五歳で仕事を一つに絞り、その自らが選んだ仕事に終身従事するサーラ国には、現在十三名のリアスがいる。

「まさかチェザがリアスになるなんて……」

「チェザは父親の死の理由を少しは知っているわ。それでもなお……いいえ、だからこそリアスへの道を進もうとしているの」

「同じ名前だからかしら？ 二人は別の肉体を持っけていても同じ心を共有しているのかしら？」

ふと、思い付いたように呟いたアンディアの言葉。

二人ともそれに対する答えは持っていなかった。未来を読み、過去を知る月姫の巫女も、ひとのこころは知らない。

「……でも……まだ、会えない、わ」

小さな声で、アンディアは呟いた。姉フアーリーは何も言わなかった。

一章 惑いの中で 3

カキーンと甲高い金属音が響いて、右手に持っていた短剣が後方へはじかれた。

強い力に思わず剣を手放してしまい、それは回りながら数メートルも飛び、土レンガで舗装された地面に突き刺さる。さらに、身体のバランスを崩して右手を地面につけてしまった。

（不覚……っ！）

「勝者。カリ・リアス様！」

審判をまかされた少女が、三日月型にくり貫いた薄い板を左手に持ち替え、この心中を知ってか知らずかうれしそうに高々と掲げた。三日月は左右対称でなく、どちらかに傾いていることから勝者の象徴とされていた。

その三日月を見やり、ちっと舌打ちする。

また、負けた。

もう数え切れないほどだったけれど、やはり悔しいものは悔しい。

「チエザ」

穏やかな語調。カリはいつも冷静で、それが剣を何度も交えた彼にはわかっていた。カリは二本の短剣を袖の中の腕に隠し持っている鞘に収めて左手を差し出したが、それを睨み付けて自力で立ち上がる。

「なんだよ。大人げねーの」

「そうか？ お前も暦が改まって、もう大人の仲間入りだろう。チエザ」

戦いやすいように短くたくし上げていた長いラカーユを正装に戻しながら、カリは胸中で苦笑した。この少年の気迫がカリを大人げなく本気にさせたのだとは、たぶん一生気づくまい。

カリは痩身に柔らかな面差しをした二十七歳の青年である。その額にはサーラ国の誰もがうらやむ十字の紋章リアスが刻まれて、赤

茶色の髪の毛はところどころが緑色に染められていた。

少年から大人への転機を迎えたばかりのチェザは、左手の短剣を鞘に収めたあと、刺さった短剣を引き抜いた。

サーラ国では双剣術が一般的である。両手に短剣を持って戦うのだ。剣術に長けているリアスは、必ずこれを会得している。それ以外の民にも遊戯として広く親しまれていた。

人を殺すための短剣ではない。サーラの民にとって短剣とは生命の象徴だ。もちろんその刃は鋭利であり、人の皮膚をたやすく切り裂くだろう。だが、だからこそ両者の間に緊張感が生まれる。それこそが崇高な瞬間なのだ。

「強くなつたな」

「口先だけで誉められてもうれしくないよ」

その科白は勝者が言うものではないとチェザは思う。

「賢しい口をきく」

カリは別段怒ったふうもなく、その整った顔に笑みを浮かべた。が、即座に右から細い腕が伸びてチェザの腕をきつくつかんだ。小柄な影。

「どんな口きいてるのよチェザ！ このお方をどなたと違って？ リアスのカリ様なのよっ」

「なんだよ。暴力女！ んなこと知ってるよ！」

「なーんですってっ！」

振りほどこうとしたが、手を放すどころかさらに強くつかまれ、さすかのチェザもその腕をつかみかえした。が。

「あちっ」

条件反射でチェザは身を引く。少女の腕が異様なまでの熱を持っていたからだ。

彼女の肩あたりから、小さな影が姿を覗かせる。トカゲの顔をしたそれはだが、れっきとした焰霊サラマンダーである。いつのまに呼んだのかと、チェザは顔をしかめた。

「おい。ずるいだろそれはないだろ」

「自分の身が危険に晒されたとき、その力を持って全力で護ることのどこがいけないっていうの？」

「晒されてねーだろ」

「殺されそうになったわ！」

「嘘つけ！」

大袈裟に言う少女と本気になって反論するチエザの必死な表情を交互に見て、カリが口元をほころばせる。柔和な顔つきだった。

「……二人とも子供だな」

「おい！」

「カリ様！」

二人の声が交錯した。先に反論したのは少女のほう。

「カリ様、それはあんまりではございませんか！ このフィーザも暦が改まり十五歳になりました。もう立派な大人ですわ。いつまでも子供供しているこのチエザとは違いましてよ」

ぱつとチエザから手を放して一気にまくしたてる少女の爛々とした黒の瞳を見て、チエザは呆れ返ってため息を一つついた。

「……よくそこまで言えるな、おい」

「フィーザの崇拝するカリ様に暴言を働いたのよ。まるこげにされなかっただけでもありがたく思ってくださいる？」

尊敬ではなく『崇拝』ときたものだ。毎度のこととはいえ、さすがに反論する言葉を失ってチエザは黙った。

カリとチエザの打ち合いはいつも、カリの家のそばにある広場で行なわれる。観客は決まって一人。審判を兼ねる、チエザと同年の少女フィーザだ。

「カリ様。このフィーザをもう子供扱いなさらないでくださいませ。次に訪れる銀の日には儀式を済ませますし、初雪の月にはフィーザも聖月の宮にきつと参りますのよ」

十五歳で一人前とみなされ一つの仕事に絞るまで、子供たちはさまざまな仕事場で雑用などを行ない、経験していく。そして、十五歳の銀の儀式で彼らは一つの仕事を得的のだ。

「ああそうだったな。おまえはリアスになりたいのだったか」

「もちろんですわ。聖月の宮にてフィーザもカリ様とともに月姫の巫女様をお守りいたしますっ」

小さなこぶしを握り締め、嬉々としてフィーザは断言した。彼女の場合、リアスになるのもただカリへの忠義によるものにすぎないという気もする。月姫の巫女ではなく。

不純な動機でリアスになろうとする志願者を、月姫の巫女は即座に見抜く力があるのだと聞いたことがある。

もしそれが本当ならばフィーザはリアスにならないだろうとチェザは思い、少しだけ優越感を感じた。そしてそんな自分を少しだけ醜く思った。

一章 惑いの中で 4

「二人とも銀の儀式が近いのに緊張もしないんだな」

太陽が紅く、西の空を染め始めたころ。

鍛冶屋の手伝いをするからと言って、フィーザがなごり惜しそうな表情でカリーに別れを告げて、明日も会うくせにとチェザには悪態をつかれてから。

うるさいわねつとチェザよりよほど大きな声で怒鳴りながらも、去っていった少女の背中を二人で見送ってから。

そういえば、チェザはほかの仕事をほとんど経験したことがなかったと今更ながらに思い返す。ほかのどんな仕事に興味はなかった。いつもカリーに学んでいたと思う。

リアスとはなんたるか、を。

(……リアスとは?)

まだ、よくわからないけれど、その答えはもうすぐそばにある気が、した。

「んー? だつてそんな必要ないだろ?」

カリーと交えた短剣を左手でもてあそびながら、淡々とチェザは答える。サーラでは両利きが多い。チェザもカリーもそうだった。双剣術では両手で短剣を扱う。どちらかの腕の力が劣っているのはバランスが取り難いのだ。

淡泊すぎるチェザの返答に、カリーは破顔した。この少年はどうしてこう、素直なのだろう。だからこそ、少し困らせてやりたくもなかった。

「俺も見に行こうか」

「えー! いいよべつに来なくてっ」

慌てた様子で口を尖らせたチェザは、身長差のかなりあるカリーを見上げた。チェザはまだ伸び盛りだ。同い年の少年たちより少し低い、その分彼は身の小柄さや軽さをカリーとの勝負で利用すること

を知らず知らずのうちに学んでいた。

カリは、チエザにリアスの素質が十分あると思っている。だが、チエザはリアスというものを簡単に考えすぎている気もするのだ。

「……本当によく考えて未来を決めたのか？」

カリの低い声。

短剣をもてあそぶチエザの手が止まった。

（……み、らい？）

しばらく無言だった。

「……………」

改めて考えたこともなかった疑問を、今カリから与えられたような気がした。月よりも遠い場所から。

一度も悩んだことなどなかった。定められたことだと思っていた。そこに挟む疑問などなかった。

カリと同じ未来。

そして、同じ名前の父と。

（父君様……）

一度もその言葉を口に出したことはない。

チエザが生まれた日に、チエザは死んだ。

見たことはないけれど、いろいろな人の口から父を聞いて、父の姿を描いていた。立派だったと口をそろえて語られる、サーラの英雄的存在を。

「決めたよ」

チエザに迷いはなかった。少なくともリアスであるカリの前で迷いを見せてはならないと思った。

「なんで？ おれがフィーザみたいに鍛冶屋とかの手伝いしてないから？ 狩りのほうがいい？ それとも機織り？ レンガ作り？」

いろいろ考えたけど、おれはリアスにかなりたくないよ」

「……父親であるチエザ・リアス様を追っているのか？」

「……………っ！」

そんなんじゃない、と叫ぶつもりだった。即座に否定できると思

っていた。

だのに、言えなかった。

「どんなつもりでリアスになろうとした？」

詰問に近いカリの言葉は、この短剣の刃よりもずっと鋭く痛い。十五歳とはいえ、まだ幼いチェザにはその質問に答えられるだけの言葉を持っていなかった。

「……じゃあさ。カリは……？ カリはなんでリアスになろうとしたの？ 父君様のティエ様がリアスの長だったから？」

「違う」

即答だった。

チェザはそれに驚いた。困らせてやるつもりで言った質問だったのに。

ティエ・リアスは、チェザの父親と同じころに負った怪我が原因で、その数日後に亡くなったと聞いたことがある。リアスの長という地位は、リアスの中で年長が務めるものではあるが、ティエは過去になく五年近くも長であり続けたそうだ。

月霊ルーシファーが彼を選んだのだ、と民は口々に言ったという。その強さが、カリにもある。

カリの茶色の瞳には、迷いなどまったくなくように見えた。それが年の功なのか、本当に迷いがいいのかチェザにはわからない。

だが、カリには意志があった。

強く、穢れのない意志。

（おれ、は？）

自問しても、そこに生まれるのは空白だけだ。

「俺はな、チェザ。サーラを護りたいんだよ」

「……サーラを？」

この大地を。サーラという国を。

サーラを護るといえることがどういうことなのか、チェザにはまったく理解できないでいた。この国に争いごとは少ない。あつたとしても誰かを傷つけたりする類の事件はまったくないと云っていい。

月姫の巫女の名のもとに、秩序を約束された地なのだ。

サーラは永遠だ。

誰もがそれを疑わない。

「平和ってわかるか？」

「へいわ……。みんなが幸せなことかな？」

今はたぶんきつと、みんなが幸せと言える気がするから。

「そうだな。そうなんだろう。おれは父に、つまり当時のリアスの長様に、十五歳になったばかりのちょうど今のチエザと同じ状況で言われたんだ。もうすぐ銀の儀式があるというとき」

「……………」

チエザは口を挟めなかった。耳をかたむけて、カリの言葉のひとかけらだつて逃さないようにしようと思った。

「『おまえは本当にリアスになりたいのか？ 私のことについてくるなよ』」

(…………あ)

今のカリと同じ言葉を…………。

「おれは答えなかったよ。銀の儀式の日まで、答えは出なかった」

「…………銀の儀式の日にわかったの？」

真摯な瞳で尋ねるチエザに、カリは笑ってみせた。優しい笑顔だった。

「儀式の中でわかった。俺が国のためにできることは、金属加工やレンガ精製ではなくてサーラ国を護ることなんだと。そして月姫の巫女様の瞳が教えてくださった。あの方は当時十八歳であられたがやはり人間ではあられないのかもしれないと思えたよ。月より舞い下りたルーシファー様の娘の化身だ、と」

銀の儀式は、未来を定めるための儀式だと言う。精霊の御名のもと、誓いを立てるのだ。そこでまことの自分が見えて、担うべき仕事を与えられる。

「…………へえ」

カリにそこまで言わせてしまう月姫の巫女とはどのような人物な

のだろう。チェザは少年らしい感情で好奇心を抱いた。

「おれも早く会ってみてーな」

「恐れ多くもお前の叔母君様であらせられるしな」

母の妹といえども、月姫の巫女である彼女に会える機会はまったくない。月に一度の聖月の祭典で見えることはできるが、もちろん話しかけることは不可能だ。彼女と普段から接し、直に話ができるのは直系の家族とリアスだけなのだから。

「そんなん言っても実感ないよ？ 母君様は今日も月姫の巫女様に会いに行くって言ってたけど」

小さいころは、妹に会いに行くといっってはカリに預けて一人出かけてしまう母が悲しかった。何故我が子を置いてまで妹に会いに行くのか。だが、カリがいてフィーザがいて近所の子供たちがいて、だからチェザは寂しくなかなかったのだ。

「月姫の巫女様も金の儀式を控えておいでだからな。我らリアスの前では何もおっしゃらないがお心細いのだろうさ」

「ルーシファー様なのに」

まだリアスではないチェザにとって、月姫の巫女とは月霊ルーシファーそのものである。チェザだけではない。サーラの民にとって、月姫の巫女は月霊ルーシファーの具現化した姿なのだ。

「月姫の巫女様はルーシファー様の化身であるが、けっしてルーシファー様そのものではないさ」

「……………？ よく、わからない。じゃあどうして月姫の巫女様がルーシファー様の化身だとわかるの？」

素直にチェザは首をかしげた。この少年は好奇心旺盛で、ときおりカリですら返答に窮するほど困難な疑問を投げかけるときがある。彼のこのころがいつまでも消えなければいいとカリは思う。

そして、この場合の解答はたった一つだ。

「おまえにリアスの資格があればわかるさ」

二章 出逢いの先に 1

「じゃあやつぱりリアスになるんだね、チエザは」

「楽しみだなあー。おれんちの隣からリアスが出るなんてうれしいです」

ごく浅い森の中を歩きながら、アストとラファイが自慢げに言った。アストはリアスであるロアの次男で十六歳。兄といっしょに鍛冶屋を経営している。

ラファイはチエザの隣の家に住む、チエザよりひとつ年下の十四歳。薬草取りの仕事がしたいと言っている。

二人とも、幼いころからチエザの親友だった。

ここは東の森と呼ばれている、比較的なだらかな斜面にある森だ。なだらかとはいえ、その奥には高い山が聳え立ち、当然ながらこの山を超えた民はいなかった。東の森は凶暴な獣が少なく木の実が豊富なことから、子供たちの遊び場として、また染め粉に使うラヌーの葉やトリアの実の採取場として、また山菜や果物など日々の食糧確保の場として様々な使用されていた。

西の森は、狩猟の森である。つまり肉を確保するために獣を捕獲する場なのだ。また河も流れているため、魚を採ることもできる。サーラの民が知る河はここだけなので、河に名前はついていなかった。ただ河とだけ呼ばれている。この森は少々危険なため、もちろん子供は立ち入ることができず、また狩りを必要以上に行なうことをしないサーラの人々は、大人であっても許された狩りの時以外はめったに立ち入らない。決まりごとはなくとも、この国ではそういった合理性が成り立っているのだ。

南の森は、子供はおろか、大人でも滅多に立ち入らない禁断の森である。ときおり聞こえる獣の咆哮はたいていこの南の森から聞こえる。人間では太刀打ちできない凶暴な獣が住む森なのだ。

北の森は月霊ルーシファアのための森とされている。それもその

はず、聖月の祠があるのが北の森だからである。ここには月姫の巫女とリアス以外は立ち入らない。そういう決まりごとがあるわけではないが、月姫の巫女を敬うことが生きる証であるサーラの民たちは、自然と聖なる森を汚すことのないよう、足を踏み入れないようにしていた。

「でも、リアスになるときの銀の儀式って特別だっていうよね」

ラファイが振り返ってチェザに尋ねた。彼らから少し遅れ気味だったチェザは、あわてて少し小走りになり、二人に追いついた。

チェザの母親が月姫の巫女の姉であることをもちろん彼らは知っているが、リアスという称号や月姫の巫女という高貴なる存在は、そんな些細なことで贖いされるほど俗世に染まったものではなかった。月姫の巫女の血縁として敬われるのは、月姫の巫女の子、父母、祖父母、そして両親を等しくした兄弟姉妹だけである。

「ん。でもおれ、がんばるよ」

アストとラファイの手前、さらりとそう言ってみせるものの、チェザの胸中は不安が押し寄せていた。何をがんばればいいのかもわかっていないのだから。

かろうじて道のように見えている獣道を歩きながら、チェザは前を行く二人の背中をじつと見つめた。彼らは自分の知り合いの中からリアスという名誉ある称号を持つ民が生まれることを心から喜び、そして自慢そうに語っていた。

「……本当によく考えて未来を決めたのか？」

カリの一言が重く、のしかかる。

今まで悩んだことなどなかった。自分がリアスになるのは当たり前だと思っていたし、それを疑いもしなかったのだ。リアスであったらロアを父に持つアストはともかく、ラファイはたぶんリアスと出会う機会や、ましてや間近で話す機会などなかっただろう。アストにしても、父ロア・リアスをかなり早くに亡くしているからリアスとの関わりはかなり少ないだろう。チェザの父とは親友であったというロアに、チェザは会った記憶はなかった。

だが、チエザは恵まれていると思う。民にとって遠い月のような存在である月姫の巫女やリアスというものを、近くで感じることができるのだから。

だがそれは、チエザ自身の徳ではない。彼もそれは承知していた。そしてそれが、母の妹が月姫の巫女だからという理由よりもむしろ、父親の功績によるもののようだというのも薄々感じ取っている。会ったこともない父。

顔も知らない。だが、父を知る民はみなチエザによく似ているという。彼らの語るチエザ・リアスは英雄だった。月姫の巫女を命を捧げて守り抜いたリアスとして。

けれどそれは、偶像。

チエザが欲しい父親像ではない。

だからこそ試したいのだ。

父親がいたというあの聖月の宮で。

父親が命を捧げて守り抜いた月姫の巫女の下で。

きっと何かが起こる。そして、そのときチエザはきっと何かができるのだと、そう漠然と確信していた。

二章 出逢いの先に 2

いつもこの東の森で遊んでいる三人ではあるが、今日は仕事である。

薬草取りの仕事がしたいと常々言っているラフィは最近、近所の薬草取りの仕事をしている女性を手伝っているのだ。休息の日をもらったアストと、銀の儀式を三日後に控えたチェザは、そのラフィを手伝ってこの森まできたのである。

必要以上に狩りをしないのはあたりまえだが、必要以上に薬草や木の実をとったりしないのもまたサーラの民の習慣だった。彼らはこうやって森羅万象と共存している。だから子供であっても木の実を unnecessary にもぎ取ったりはしない。彼らはラフィが探しているというジュオンの葉だけを探していた。

「あつたー？」

「うーん。前はこの辺にあつただけどなー」

ジュオンの樹は背丈こそさほど大きくはならないが、大きな葉が特徴で、それはチェザの片腕の長さと同じほどになったりする。ラフィは丁寧に葉を確認しながらあたりの木々を選別していった。ジュオンの葉は毒草であるセキアの葉によく似ているのだ。間違えてはならないことは彼らもよく承知している。

「あ、あつた！ これだよな」

チェザが葉の一枚をラフィに示した。チェザはこういった仕事の手伝いを直接したことはなかったが、それでもいつもラフィたちに付き合っていたので、薬草の見分け方はそれなりに詳しくなっていた。それでも、チェザが世間知らずだと思われるのはたぶんきっとその経験のなさなのだろうと思う。

子供たちはいろいろな仕事を経験して十五歳を迎える。その経験の中から生活を学ぶのだ。このサーラがどのように成り立っているのか。生きていくために必要な仕事。そして自分に見合う仕事。そ

ういったものを知っていく。どんな仕事を選んだとしてもそこでの経験はもちろん、生活のすべてで役に立つはずだ。

チエザはそれを知らない。生まれたときからリアスしか見えていなかった。それがいいことなのか、それとも悪いことなのか、まだ誰も知らないけれど、だが少なくとも世間知らずなことは確かだ。

とはいえ、カリや母のフアーリーなどから得た知識はそれなりに豊富である。昔から賢い子供だったから、行動力や瞬発力、記憶力などに優れていたのだ。

ラフィがチエザのもとに駆けより、葉を確認する。

「うん。たしかにジュオンの葉だ。えっと……大きめのを三枚だったかな」

葉を余分に取ってはいけない。森は彼らの命の源だ。日々の食べ物を作り、薬を提供し、癒しの風を吹かせる。ラフィは虫に食われていない葉を三枚だけ選んでもぎとった。

「あれ？ アストさまは？」

ふと二つ目の葉をとりながら、ラフィがあたりを見回して言った。幼い子供であっても、年齢を尊重するサーラでは年上の友を呼び捨てにはしない。

「……そういえば」

たしかに見える範囲にアストの姿はなかった。

「アストお〜？」

チエザは少しだけ声を張り上げてアストを呼ぶ。彼は年上であるうとなかろうと、まったくといっていいほど態度に変化がない。アストやラフィもそんなチエザの態度には慣れていた。

安全とされる東の森なのだから、もしはぐれたとしても身の危険を心配することはないだろうし、もう何度もこの森を訪れている彼らだから、迷子になることは考えられない。何かあったとしても、彼らは一人だけで家に帰ることは十分可能である。

だからそのとき二人は、ジュオンの葉を探して少し深く森に入り込んでしまったのかと思ったのだ。それだけだった。

「いないね」

獣道を奥へ進みながら、大きなジュオンの葉を両手で抱えたラフィが前を歩くチェザに声をかけたが、チェザからの返事はなかった。ただ、唐突に立ち止まり、ラフィはチェザの背中に頭をぶつけていた。

「チェザさまあ」

少し慄然とした声で抗議するものの、チェザは振り返らない。

「……アスト？」

「え。いたの？」

チェザの瞳はくねった獣道とは違う方角を見ている。唐突に固まったように動かなくなったチェザの背中を見遣り、ラフィが少し不安そうな声で尋ねた。その声が案外響いたのか、チェザが驚いたようにラフィを振り返った。

その眉は怪訝そうにゆがめられている。

「あそこにアストが……。でも」

チェザは前方を指差した。獣道から少し外れたところ、木々や葉によって隠されてはいるが、かろうじてアストの白い麻の衣服が見える。だが、今のチェザはそんなものを見ていなかった。チェザの視線はそれよりも少し低い位置にある。

「どうしたの？ チェザさま、アストさま」

ラフィがチェザの背中から覗き込み、そしてそのまま彼も言葉を失った。

アストが立ち尽くすその足元には、ひとが倒れていたのだ。

二章 出逢いの先に 3

サーラで病気や怪我を治せる職業、つまり医者として認められているのはリアスの中でも限られている。だから、もちろん彼らに治療というものの経験はない。リアスと長く接してきているチェザでさえ、治療を手伝わせてもらえたことはないし、おそらく力にもできないだろうと思う。

ラフィの持っているジュオンの葉は怪我の治療に使用するものではあるが、薬草を採るのが仕事というラフィにその使用方法がわかるはずもなかった。

「……アスト」

もう一度チェザが声をかけると、ようやく彼は我に返ると、振り返って二人を見た。

「倒れていたんだ。でもこのひと……ルーシファー様かもしれない……」

唐突にアストが漏らした一言は、二人に衝撃を与えるには十分すぎるものだった。

月霊ルーシファー。

彼らサーラの民にとって、この名ほど神聖なものはない。彼らを導くのはいつでも月に住むと言われている月霊ルーシファーだったから。

そして、彼女の娘がこのサーラを創った。

「……え？」

チェザはなぜアストがこんなことを言い出すのか理解できず、とりあえずその月霊ルーシファーかもしれないと言われた人間に近づいた。そのあとにラフィが続く。こぶしを強く握り締めた。

月姫の巫女しか会うことを許されていない月霊ルーシファー。そんな精霊に会えるのかもしれないという期待が、チェザの中には少なからずあったのだ。

「……あ」

一目見て声を発したのはラフィのほうだった。両手でかかえていた三枚のジュオンの葉がばらばらと足元に落ちたが、それすら気づいていなかった。

「こんなのって……」

「ルーシファー様だろ？」

アストはリアスの知り合いが多いチエザにそう確認するが、チエザに答えられるはずもなかった。チエザはまだリアスでない。それに、リアスでさえ月霊ルーシファーを見ることは叶わないのだ。だが、感じることはできるのだと、カリは言っていた。

「でも、ルーシファー様は女のひとだよ」

そう言い切ったのはラフィ。たしかに見たことはなくても、月霊ルーシファーは女性とされていた。それは月姫の巫女が女性であるからにはかならない。

チエザはじつと倒れている男を見つめる。

年は二十代後半くらいだろうか。たぶんカリと同じくらいの年齢だろうと思う。見たこともない格好をしていた。黒い布に何かいろいろな文様が描かれている。しかも布を縫って加工することを知らないこの国では、腕や首を出す場所が作られていたり上下に分かれていたりするその服装は奇妙に映った。

そして何よりこの青年を月霊ルーシファーだと思い込ませたのは、その髪の毛。

頭部全体を布で巻いているために最初はわからなかったが、そこからこぼれる髪の毛は明らかに金色に輝いている。癖のある長い髪は、夜空に輝く月や、月姫の巫女の瞳と同じ色をしていたのだ。

アストが月霊ルーシファーではないかと思うのも無理からぬことであつた。

金色はサーラにとって聖性の証。

月霊ルーシファーやその娘システイザーナ、そして末裔である月姫の巫女にしか現われることのない色なのだ。身体に金色の刻印を

持つ民はいない。金色を纏うことを許されているのがリアスと月姫の巫女の近しい血縁者である。

サーラの民の髪は黒、赤、茶であることが多い。月姫の巫女の血筋はたいてい黒であり、遠縁になるほど赤や茶色が出やすいらしい。アストとラフィはともに赤に限りなく近い茶色で、チェザはやはり黒髪をしていた。

「じゃあ……このひとは？」

金色の刻印を持つサーラの民はいない。

それでは……。

「わからない……誰なんだろう」

「生きて、いるの？」

ラフィが不安そうに尋ねた。その口調には人間なのかと問いかける調子も含まれている。チェザが一步だけ男に近づいたものの、さすがにしゃがみこんで男の顔を覗き込むことはできなかった。

サーラの民以外の人間を知らない彼らにとつて、この男がいくら人間の姿形をしていようと、金色の髪というその異質さだけで、生きている人間には見えなくなってしまう。倒れている男の不可思議な服装なども手伝って、それはまるでシステイザーナと同じ、月霊ルーシファアの落とし子のようなだった。

「でも、動かないよ。生き物じゃないのかも」

「え……」

アストの言葉を突飛過ぎると思いつつも、だが誰も反論する言葉を持たなかった。

しばらくは静寂の中に、森の息吹だけが流れた。

「……う」

その閑静に、男のうめき声が奇妙に響いた。

「！」

びくり、と三人の身体が一斉に反応する。驚愕のあまり、叫び声すら出すことができなかった。

男はわずかに身じろぎした。

そして、三人の瞳が見つめる中、彼はゆっくりと瞳を開けた。

「……あ」

誰からともなく、呟きがもれた。

彼の瞳は、三人の想像通りに……月姫の巫女と同じ金色であったのだ。

月霊ルースファーでないにしても、月からの使者であると錯覚してもおかしくないほどの神聖を持った瞳に見えた。

「メティ・ラ・デューダ……」

彼が弱々しい声で何事かを呟いた。もちろんチエザたちにはそれを理解することはできなかった。

チエザが一步あとずさった。それを合図とするかのように、彼らは踵を返すと一目散に走り出していた。後ろは振り向かなかった。

二章 出逢いの先に 4

「……あつ」

東の森をちょうど抜けたところで、最後尾を走っていたラファイが声を上げて立ち止まった。チェザとアストは立ち止まり、何事かと振り返った。

「ジュオンの葉、忘れてきちゃった……」

「えっ」

子供たちにとっても、任された仕事は責任を持ってやりとげなければならぬものだ。いくら正体不明の男がいたからといっても、それはいいわけにしかないし、そもそもそんなことを信じてはくれまいと彼らは一様に思った。

「ど、どうしよう……」

ラファイは少しだけ森を振り返った。いつも来ているはずの森なのに、それが想像の中にある南の森と重なった。恐ろしくて、まるで黒い雲がかかっているようにすら感じる。

「よし、戻ろう！」

即座にそう断言したのはチェザだ。

怖いもの知らずの上に、人一倍プライドの高いチェザは、先ほど走って逃げ出してしまったことをいまさらながらに後悔していた。なぜあそこで逃げ出したのか、もしかしたら月からの使者かもしれない高貴なひとを置いて。怪我をして動けなかったのかもしれないだのに、そんな彼を放ってきてしまった。

「……そうだなア。おれも戻るよ」

「アストさままで！」

「じゃあラファイはここに残る？」

「……ううん。行く」

アストの意地の悪い笑みに、ラファイはついそう口走ってしまった。言っただけはつと気づいた。

「ずるいー！」

「ほら行くよ」

チエザを先頭に、アストとラフィが続いた。

三人の白い背中を、暮れかけた太陽が橙色に染めていた。

二章 出逢いの先に 5

男が倒れていた現場に近づくにつれ、ラフィの足取りは重くなっていた。

アストは慎重に歩みを進め、チェザは高鳴る心臓を押さえきれずにいた。それは恐怖の中にある期待だった。

（おれはなにを期待してるんだろう？）

月霊ルーシファアの化身かもしれないこと？

（でも、それは月姫の巫女様のことだし）

母フアーリーの妹に、チェザは遠目にしか会ったことはないけれど、きつと夜空の月のように気高い瞳をしているのだと思っていた。勝手に想像していた。ほかの民と同じように、期待していた。

だからあの男が月霊ルーシファアだということはありえない。歩きながら冷静になりつつある頭で、チェザはそう分析する。

でも、アストのいうように月からの使者かもしれない。

月霊ルーシファアの娘であるステイザーナが月からこの地上に舞い降りたとき、月の民が何人が供をしたと言われている。そのときのように、きつと月から新たな使者が舞い降りたのだ。この結論は理論にかなっている気がして、チェザは一人で満足してうなずいた。

やがて、先ほどと同じくらいまでには男に近づいていた。ラフィは慌てた様子で落とした三枚のジュオンの葉を見つけて拾い上げた。ここにたどり着く前に、もちろんいくつかのジュオンの樹を見つけてはいたが、それらを採ることはしない。三枚採ってこい、と命じられたラフィは、ジュオンの樹から三枚の葉だけを採ってこなければならぬ。それ以上でもそれ以下でもないのだ。

「ね、ねえ。どうするの？」

目的を果たしたラフィは一刻も早く森を抜け出したいのに、チェザはゆるぎない瞳を繁みの奥へ向けていた。もう冬が間近に迫って

いるサーラの昼は短い。今日はもちろん闇の日ではないから月が出ているけれど、それでも森の中にいるのだから月があるうとなかろうと暗いことに変わりはない。

「チェザ、どうするんだ」

アストが警戒して尋ねる。年長者として、そして唯一の銀の儀式経験者……つまりは大人として、これ以上の危険は犯すべきではないと忠告したのだが、チェザの背中はその反発していた。

まっすぐと倒れている男のそばに近づくチェザを、二人の瞳はただ一心に見つめた。

やはり変わらない、輝く金色の髪。

チェザは改めてそれを確認する。

男は近づくチェザの足音に気づいたのか、上半身を持ち上げながら振り向いた。聖なる金色の瞳がチェザをとらえた。視線が一瞬だけ交錯した。

「……………」

それはあまりにも整いすぎた、優雅な美貌だった。おもわずチェザは息を呑む。先ほどはそんなことを確認している余裕はまるでなかったのだ。

「……………」

怪我をしているのだろうか。身体を動かしたとたん、彼の表情は苦痛にゆがむ。そんな表情すら、この世界のものとは思えないほどに整ったものだったことに、さらなる驚愕を覚え、また彼が月の住人であることをチェザはどこかで確信していた。

（月から降りてくるのに失敗したとか？）

チェザはあたりを見回してみる。すぐに目的の物は見つかった。この時期ならたくさん生えているはずだから。

それはビアの葉とビアの実だ。

どちらも食用になる。秋も終わるこの果実の月にもっともよくとれる食料であり、また冬の間の保存食としても重宝されるものだった。ビアの実には彼らサーラの民の主食のひとつでもある。

チエザは葉を二枚と実を二つ手でちぎると、その男に差し出した。
「これ、やるよ。食べればきつとゲンキになるよ」

チエザの差し出したものを、男は怪訝そうな表情を浮かべながらも受け取った。そして、そのとき初めて気づいた。チエザたちもたしかにこの男に対していくらかの恐怖を抱いている。だが、それと同様に、この男もまた見知らぬチエザたちを恐れているのだ、と。

「……シン・……ケル・ラー……」

彼は何かをチエザに言った。

そのときのチエザには、この男が月からの使者であろうとなかろうとどちらでもよかった。ただ、助けてあげなければならぬとそう感じたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7313x/>

【夢幻の大陸詩】 月姫楽土の子供たち

2011年12月7日22時52分発行